R４

将来の自立と社会参加につながる １２年のつながりや積みあげを意識した学習と キャリア教育の視点を取り入れた授業改善

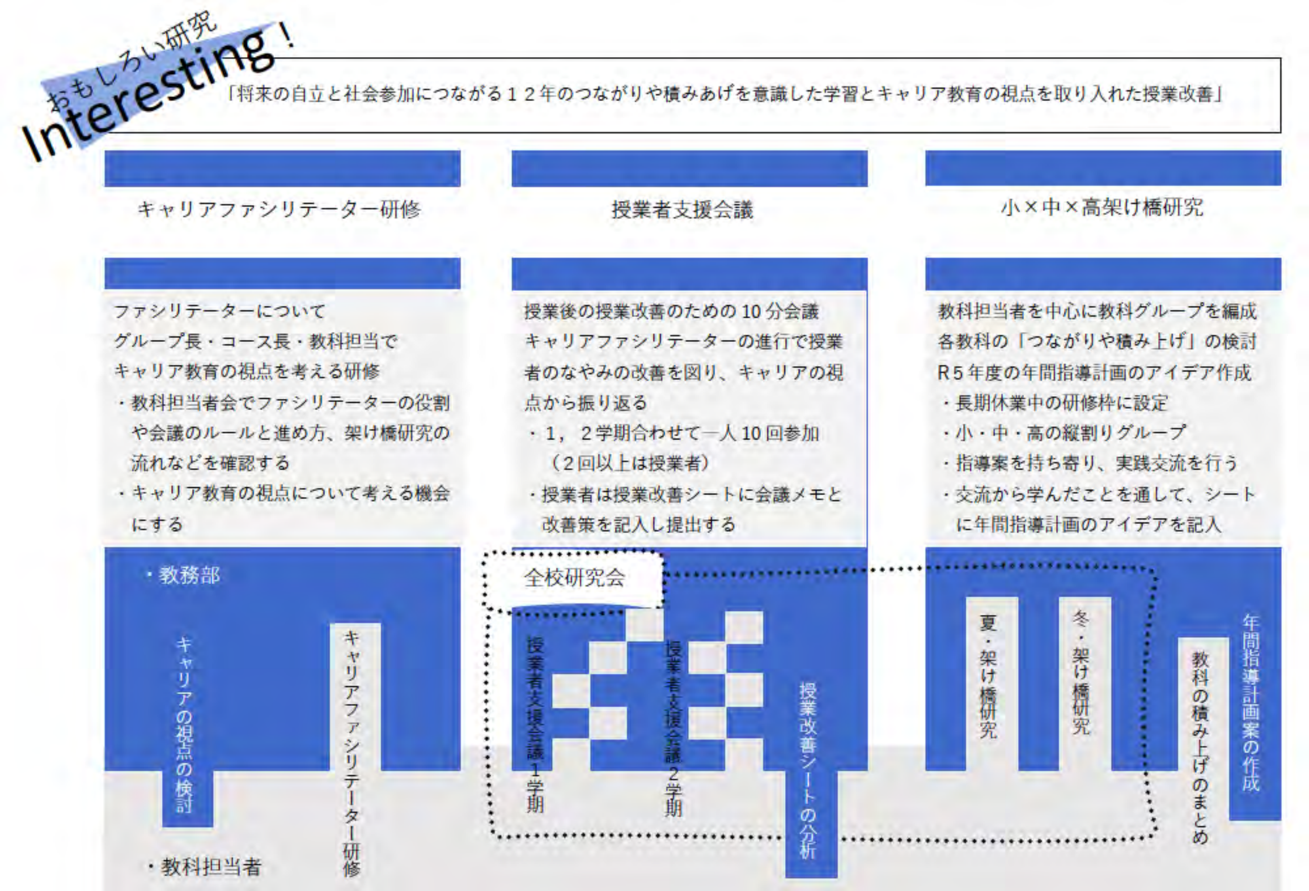
【はじめに】

令和３年度「学習指導要領に基づく将来の自立と社会参加につながるキャリア教育の視点を取り入れた授業改善」を研究主題として取り組んだ。具体的には、授業サポートする役割を担うグループ長（コース・学年長）を対象に「キャリアファシリテーター研修」を実施し、授業者支援会議のキャリア教育の土台作りを行った。「授業者支援会議」は３ヶ月の期間で100回の実施を目指し行った。また、架け橋研究では教科グループごとに学部間のつながり（系統性）を意識しながら年間指導計画（案）を作成していったが、キャリア教育の視点を授業改善に落とし込むことの難しさが課題として残った。

令和４年度は、昨年度の前次研究の課題分析を行い、築いた土台をさらに発展させ、指導者間の「学び合い」を意識し、テーマとして「INTERESTING おもしろい研究」を掲げ、より具体的なファシリテーターの役割と効果的な会議の進め方、「キャリア教育」の視点を授業改善に落とし込むための方法を模索し、「期待する子どもたちの将来の姿」を考え共有しながら授業の組み立てを相談することを研究主題として取り組んだ。

本研究の成果が、本校教員の専門性の向上につながり、障害のある児童生徒のキャリア教育の視点に基づく教育的ニーズに応じた指導・支援の一層の充実が図られることを期待したい。

【研究デザイン】



「将来の自立と社会参加につながる１２年のつながりや積みあげを意識した学習とキャリア教育の視点を取り入れた授業改善」

キャリアファシリテーター研修

ファシリテーターについて
グループ長・コース長・教科担当で
キャリア教育の視点を考える研修
- 教科担当者会でファシリテーターの役割や会議のルールと進め方、架け橋研究の流れなどを確認する
- キャリア教育の視点について考える機会にする

授業者支援会議

授業後の授業改善のための10分会議
キャリアファシリテーターの進行で授業者のなやみの改善を図り、キャリアの視点から振り返る
- １，２学期合わせて一人10回参加（２回以上は授業者）
- 授業者は授業改善シートに会議メモと改善策を記入し提出する

小×中×高架け橋研究

教科担当者を中心に教科グループを編成
各教科の「つながりや積み上げ」の検討
R５年度の年間指導計画のアイデア作成
- 長期休業中の研修枠に設定
- 小・中・高の縦割りグループ
- 指導案を持ち寄り、実践交流を行う
- 交流から学んだことを通して、シートに年間指導計画のアイデアを記入

【授業者支援会議】

＜３つの方向性＞

第１に授業改善として南山城型授業者支援会議を設定した。これは、東京都立光明学園の授業改善手法「KOMEI 授業改善ハンドブックから明日の授業を改善する～Ver.4」を参考にして本校の実態に合わせた授業者支援会議である。

第２にファシリテーターの育成である。会議の目的を理解し、円滑に進行を行い、意見を引き出し、会議を活性化させる役割の教員が各支援会議には、必要だと考えた。特に「期待する子どもたちの将来の姿」を共有する役割を担う。

第３に授業者支援会議において「キャリア教育の視点」を意識できるようにするために、授業者が考える「期待する子どもたちの将来の姿」について会議の始まりに参加者に伝え、共有することで、指導、支援の意味づけを考え、授業をどのように組み立てるかを相談できる仕組みを取り入れた。

＜授業者支援会議とは＞

（１） グランドルール
- 授業者を応援するルールを設定した短時間の小規模な授業改善のための会議
- 授業者が悩みを一つ提示し、参加者がそれに応じたアドバイスを送る。
- 参加者は、分析よりも具体策で伝える。疑問に思ったことだけでなく、改善のアイデアを伝える。

（２）授業者支援会議の利点
- 授業者が求めたことに対してのみ協議することで課題のポイントが絞りやすく、授業者は、批判や指摘と感じないので心理的負担が少ない。
- 次回の授業に改善策を取り入れるかどうかは、授業者の責任で決めることとする。授業者が納得できて取り入れやすい改善策を授業者自身が選ぶことになり、授業者の思いや考えを反映させやすい。

（３）会議の工夫点
- 授業に関係する指導者が日常的に会議を行えるように１０分間の会議設定とする。
- ファシリテーターが会議の時間の管理や進行を行い、話しやすい雰囲気を作る。
- 会議後アドバイスを総合的に判断して授業者自身が改善策を考え次回の授業に生かす。
- 「期待する将来の子どもたちの姿」を授業者が伝えてから会議をすすめる。
- まとめやすく記入しやすい「授業改善シート」を利用する。

＜授業者支援会議の研究方法＞

①令和３年度の課題検証

②南山城型授業者支援会議 全校で実施 七月～十二月（各自、十回程度参加）

③授業改善シートの「期待する子どもたちの将来の姿」を「知的障害のある児童生徒のキャリアプランニングマトリックス（試案）国立特別支援教育総合研究所」と照らし合わせて分類、各学部の傾向と違いを分析

④「期待する子どもたちの将来の姿」を提示した会議と提示しなかった会議との改善策の違いを分析

⑤結果を全校で共有する

＜結果＞

（１） 令和３年度の課題の検証

授業者支援会議を積み上げることにより、授業改善の会議は日常的に行えるようになっていった。しかし、「キャリア教育の視点について、概念や具体的な実践例等、広く浸透させるまでには至らない」という意見が複数あった。そこで、なぜ、「キャリア教育の視点」を授業改善に入れるのは難しいのかについて検討した。
- 「キャリア教育とは何か」との問いに一言で応えることが難しいから。
- キャリア教育のイメージが進路指導などと混同してしまいやすいから。
- 特定の指導領域や指導の形態において行うものと感じてしまうから。等の意見が多く見られた。

（２）「期待する子どもたちの将来の姿」の共有

①授業改善する学習に対する授業者の思い（期待する子どもたちの将来の姿）を話してから授業者支援会議を進める。

②キャリアファシリテーターが以下のような発問をすることで共有を図る。

（発問例）・どんな力が必要だと思いますか。　・学ばせようとしていることは何につながりますか。
・子どもたちにどうなってほしいと思ってこの学習を計画しましたか。
・気になることが改善されるとどんな力がつきますか。

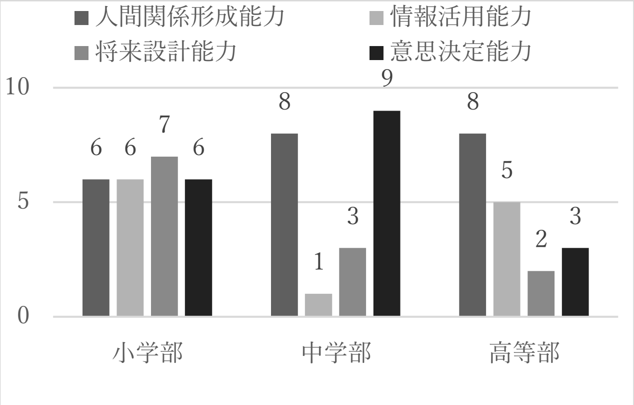
（３）授業改善シートの分類と分析

①分類結果（授業者支援会議９６件／発問あり５８件）

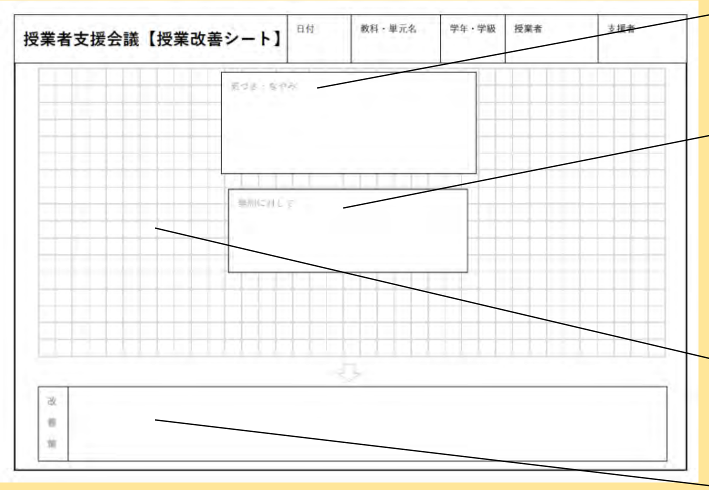
授業者支援会議で提示された「期待する子どもたちの将来の姿」を試案の項目に当てはめると、容易に関連づけられ分類することができた。この方法で振り返ると指導の根拠や手立ての妥当性がはっきりすることが分かった。

②小学部・中学部・高等部ごとに、まとめると「将来に期待する児童生徒の姿」に学部ごとの違いは見られなかった。

③「期待する子どもたちの将来の姿」を共有した会議においては、参加者のアドバイスの中にそれを見通した改善策が現れるようになった。



授業者支援会議【授業改善シート】



授業者支援会議【授業改善シート】　日付　教科・単元名　学年・学級　授業者　支援者

気づき・なやみ

発問に対して

改善策

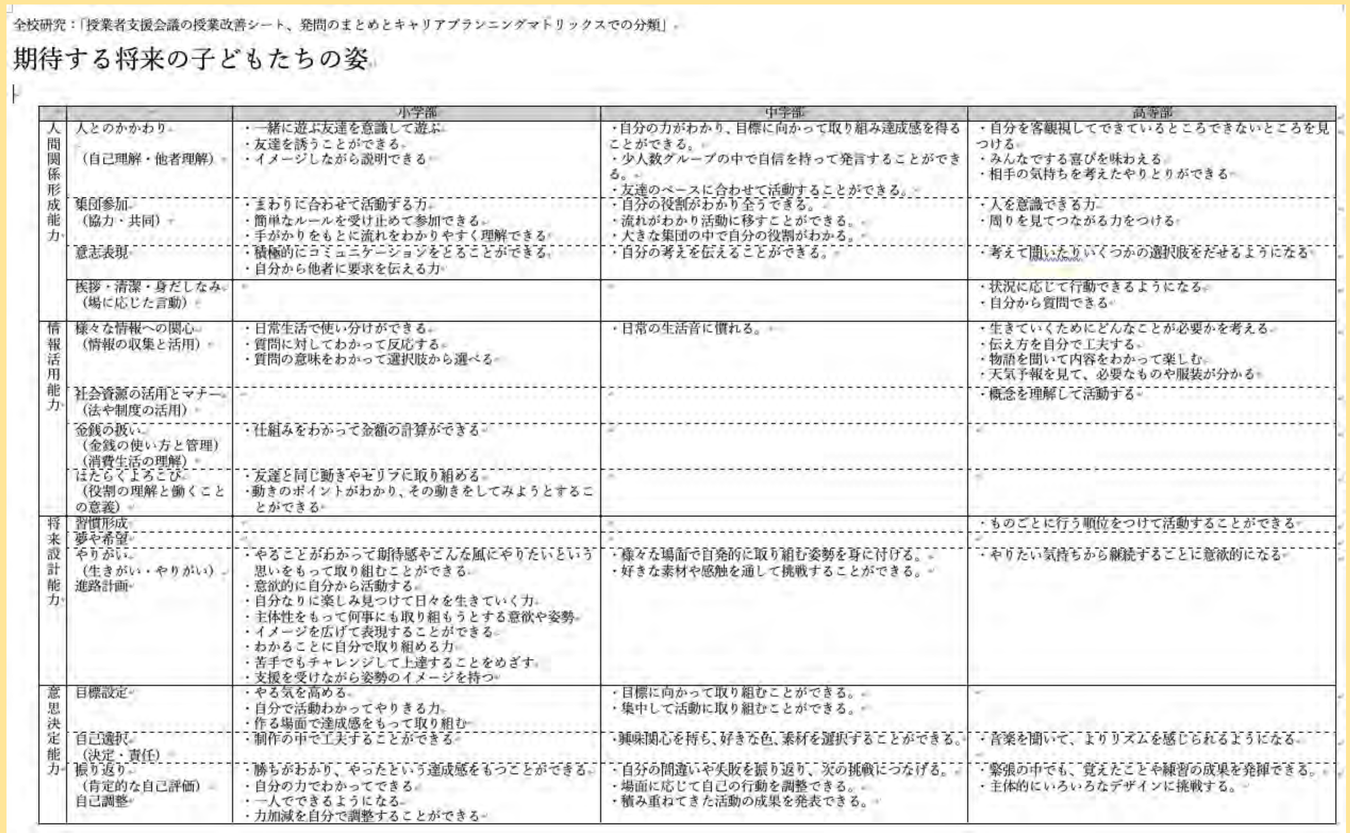
授業者が「気づき・なやみ」を記入する

「期待する子どもたちの将来の姿」を記入する
キャリアファシリテーターが以下のような発問をすることで共有する
- どんな力をつけたいですか
- どんな力が必要だと思いますか
- その力は何のための力ですか
- どうなってほしいと思ってこの学習を計画しましたか

支援者の意見やアドバイスをすべて記入する

支援者からのアドバイスを受けて、次回から改善できそうな案を授業者自身が決める

＜授業者支援会議の考察＞



全校研究：「授業者支援会議の授業改善シート、発問のまとめとキャリアプランニングマトリックスでの分類」

期待する将来の子どもたちの姿

		小学部	中学部	高等部
人間関係形成能力	人とのかかわり（自己理解・他者理解）	・一緒に遊ぶ友達を意識して遊ぶ ・友達を誘うことができる ・イメージしながら説明できる	・自分の力がわかり、目標に向かって取り組み達成感を得ることができる。 ・少人数グループの中で自信を持って発言することができる。 ・友達のペースに合わせて活動することができる。	・自分を客観視してできているところできないところを見つける ・みんなでする喜びを味わえる ・相手の気持ちを考えたやりとりができる
	集団参加（協力・共同）	・まわりに合わせて活動する力 ・簡単なルールを受け止めて参加できる ・手がかりをもとに流れをわかりやすく理解できる	・自分の役割がわかり全うできる。 ・流れがわかり活動に移すことができる。 ・大きな集団の中で自分の役割がわかる。	・人を意識できる力 ・周りを見てつながる力をつける
	意志表現	・積極的にコミュニケーションをとることができる ・自分から他者に要求を伝える力	・自分の考えを伝えることができる。	・考えて聞いたりいくつかの選択肢をだせるようになる
	挨拶・清潔・身だしなみ（場に応じた言動）			・状況に応じて行動できるようになる ・自分から質問できる
情報活用能力	様々な情報への関心（情報の収集と活用）	・日常生活で使い分けができる ・質問に対してわかって反応する ・質問の意味をわかって選択肢から選べる	・日常の生活音に慣れる。	・生きていくためにどんなことが必要かを考える ・伝え方を自分で工夫する ・物語を聞いて内容をわかって楽しむ ・天気予報を見て、必要なものや服装が分かる
	社会資源の活用とマナー（法や制度の活用）			・概念を理解して活動する
	金銭の扱い（金銭の使い方と管理）（消費生活の理解）	・仕組みをわかって金額の計算ができる		
	はたらくよろこび（役割の理解と働くことの意義）	・友達と同じ動きやセリフに取り組める ・動きのポイントがわかり、その動きをしてみようとすることができる		
将来設計能力	習慣形成			・ものごとに行う順位をつけて活動することができる
	夢や希望			
	やりがい（生きがい・やりがい） 進路計画	・やることがわかって期待感やこんな風にやりたいという思いをもって取り組むことができる ・意欲的に自分から活動する ・自分なりに楽しみ見つけて日々を生きていく力 ・主体性をもって何事にも取り組もうとする意欲や姿勢 ・イメージを広げて表現することができる ・わかることに自分で取り組める力 ・苦手でもチャレンジして上達することをめざす ・支援を受けながら姿勢のイメージを持つ	・様々な場面で自発的に取り組む姿勢を身に付ける。 ・好きな素材や感触を通して挑戦することができる。	・やりたい気持ちから継続することに意欲的になる
意思決定能力	目標設定	・やる気を高める ・自分で活動わかってやりきる力 ・作る場面で達成感をもって取り組む	・目標に向かって取り組むことができる。 ・集中して活動に取り組むことができる。	
	自己選択（決定・責任）	・制作の中で工夫することができる	・興味関心を持ち、好きな色、素材を選択することができる。	・音楽を聞いて、よりリズムを感じられるようになる
	振り返り（肯定的な自己評価） 自己調整	・勝ちがわかり、やったという達成感をもつことができる ・自分の力でわかってできる ・一人でできるようになる ・力加減を自分で調整することができる	・自分の間違いや失敗を振り返り、次の挑戦につなげる。 ・場面に応じて自己の行動を調整できる。 ・積み重ねてきた活動の成果を発表できる。	・緊張の中でも、覚えたことや練習の成果を発揮できる。 ・主体的にいろいろなデザインに挑戦する。

指導者は、数年後の子ども像ではなく、人としての普遍的な姿をイメージし、「◯◯ように育ってほしい、◯◯な力をつけてほしい」と期待していることがわかる。

キャリア発達の視点を持った授業改善とは、

「将来の児童生徒の姿のイメージを授業者が共有し、その力をつけるために、どうするかという視点から、授業の改善点を見つけていくこと」

ではないかと考えられる。

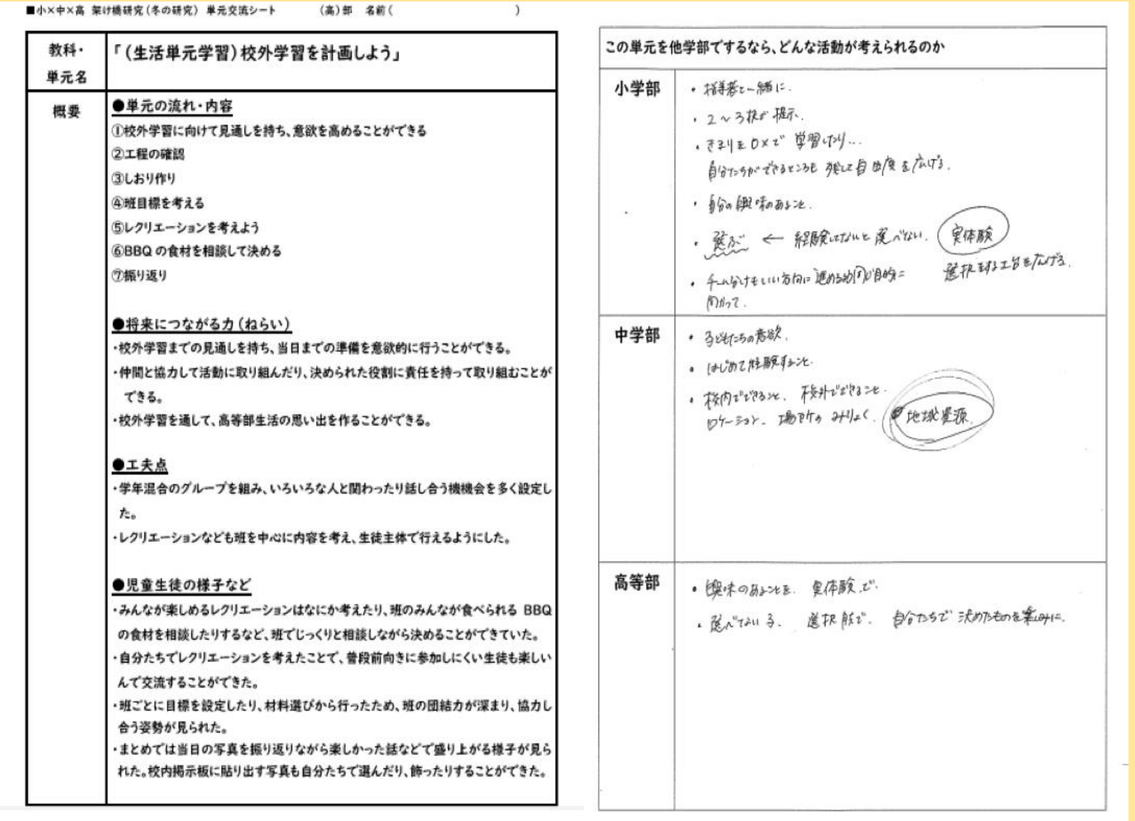
【小×中×高架け橋研究】

小×中×高架け橋研究は、他学部と授業実践を交流することで、他学部でどんな取組をしているのかを学び合い、教科における学部間や教科のつながり（系統性）を考え、次年度の年間指導計画（Ⅲ表）に活かしていくことをねらいとして取り組んだ。

架け橋研究では、夏と冬、ともに小・中・高と縦割りでグループを編制し、教科ごとの実践交流を行った。

夏の架け橋研究では、該当グループの年間指導計画（Ⅲ表）を持ち寄り、計画をもとに成果や課題などを交流した。学部によって取扱うものやねらいの違い、小・中・高それぞれの段階で考えていることや取組を知ることができたとの意見が多く挙げられた。学部間の「つながり」や「積み上げ」、そして「違い」に気づくことができ、さらに「小・中・高と学ぶ内容を理解した上での授業作り」「Ⅲ表の定期的な見直し」など、自分のグループに取り入れたいアイデアを考え、２学期の実践へとつなげることができた。

冬の架け橋研究では、２学期に取り組んだ単元について書き込んだシートを持ち寄り、夏の架け橋研究で記入した改善シートを参考に、単元の内容、工夫点などについて交流した。この単元交流シートをもとに、同じ名前の単元であったとしても小・中・高それぞれの段階に合った学習にできるのでは？と、各教科でアイデアを出し合った。この活動を通して、今まで漠然としていた「系統性」であったが、つながりや積み上げとは何かが見えてきたのではないかと考える。



■小×中×高　架け橋研究（冬の研究）　単元交流シート　　（高）部　名前（　　　　）

教科・単元名	「（生活単元学習）校外学習を計画しよう」
概要	**●単元の流れ・内容** ①校外学習に向けて見通しを持ち、意欲を高めることができる ②工程の確認 ③しおり作り ④班目標を考える ⑤レクリエーションを考えよう ⑥BBQ の食材を相談して決める ⑦振り返り **●将来につながる力（ねらい）** ・校外学習までの見通しを持ち、当日までの準備を意欲的に行うことができる。 ・仲間と協力して活動に取り組んだり、決められた役割に責任を持って取り組むことができる。 ・校外学習を通して、高等部生活の思い出を作ることができる。 **●工夫点** ・学年混合のグループを組み、いろいろな人と関わったり話し合う機機会を多く設定した。 ・レクリエーションなども班を中心に内容を考え、生徒主体で行えるようにした。 **●児童生徒の様子など** ・みんなが楽しめるレクリエーションはなにか考えたり、班のみんなが食べられる BBQ の食材を相談したりするなど、班でじっくりと相談しながら決めることができていた。 ・自分たちでレクリエーションを考えたことで、普段前向きに参加しにくい生徒も楽しいんで交流することができた。 ・班ごとに目標を設定したり、材料選びから行ったため、班の団結力が深まり、協力し合う姿勢が見られた。 ・まとめでは当日の写真を振り返りながら楽しかった話などで盛り上がる様子が見られた。校内掲示板に貼り出す写真も自分たちで選んだり、飾ったりすることができた。

この単元を他学部でするなら、どんな活動が考えられるのか	
小学部	・指導者と一緒に。 ・２～３択で提示。 ・きまりを〇×で学習したり… 自分たちができるところも残して自由度を広げる。 ・自分の興味のあること。 ・選ぶ ← 経験してないと選べない。　実体験 選択をする工夫を広げる。 ・チーム分けもいい方向に進めるか同じ目的に向かって。
中学部	・子どもたちの意欲。 ・はじめて体験すること。 ・校内でできること。校外でできること。 ロケーション。場所の魅力。　地域資源
高等部	・興味のあることを。実体験で。 ・選べない子。選択肢で。自分たちで決めたものを楽しみに。

＜小×中×高架け橋研究のまとめ＞

架け橋研究を通して学部間のつながりをどう捉えたかの質問に対して、「共通する部分も多いが、生活年齢や実態を反映した取組になっている」「小学部で学習したことを、中・高で発展した学習ができればよい。学部で終わってしまわないような工夫が必要」などの意見が多く挙げられた。（架け橋研究後のまとめシートより）「同じ題材やテーマでも生活年齢や学習経験によって取り組み方やねらうところが違うこと」「同じ題材ならば、高等部、中学部、小学部と何かがつながっているのか、小学部から高等部へ積み上がるなら、小学部では何ができるのか考えること」というように具体的に学部間のつながりを捉えることができた。

また、年間指導計画（グループ長、コース長が案を作成）については、交流で取り組んだ単元交流シートをグループに返し、次年度の年間指導計画作成の活用につなげた。各学部から作成する上で参考になったなどの声もあり、交流のアイデアを取り入れた作成にもつながった。

【まとめ】

今年度の研究を進める中で、「授業者支援会議」では、キャリア教育の視点を意識した授業改善につなげていくことができた。キャリア教育の視点をもった授業改善とは、将来の児童生徒の姿をイメージし、授業に関わる人、みんなが共有すること、そして、その力をつけるためには、どうするかという視点から授業の改善点を見つけていくことであることが見えてきた。子ども達の将来なってほしい姿をイメージしながら、「キャリアプランニングマトリックス（試案）」で確認していく方法を取り入れることで、その指導の根拠を確認しやすくなった。昨年度、キャリア教育の視点を入れることが難しいという意見から授業改善シートなどの改善を進めてきたが、これらの方法でキャリアの視点を取り入れることが増えてきた。また、授業者支援会議を昨年度から続けてきていることで、取り組みやすく、より授業者支援会議を活用しての授業改善を進めることができたのではないかと考える。

また、「小×中×高架け橋研究」では、つながりについて、一人一人の学びの積み重ねや、同じ題材であっても生活年齢や学習経験によって取組内容やねらいがかわるなどの捉え方に関わる気づきになった。

今年度の研究をとおして、キャリア発達の視点や学部間のつながり、積み上げの捉えについて、一人一人が考えを深めていくことができた。また、学習内容チェックシートを作成し活用することで学習指導要領とのつながり、学びの経過を可視化することにも繋げることができた。方法やツールの検証を続けていくことで、さらに深めていくことができる。次年度以降も、これまで検討してきたツールや方法で継続的、組織的に授業改善を進めていきたいと考える。